

編集後記

本誌の編集に携わるのは今回が初めてである。もっとも、実際にはもうおひとりの委員の方と事務局の方に頼りきりだったわけであるが、それでも責任の重さと編集の難しさを痛感した。最終的な掲載本数はやや少なめではあるものの、それを補って余りある優れた論文を掲載できたことを大変に嬉しく思う。投稿くださった先生方に深く感謝したい。

ところで、業務のためにセンターに来所する際、「語学視聴覚室」の横を通るが、視聴覚資料を利用している学生たちの姿が目に入る。大学生だった自分を少し思い出し、嬉しさと懐かしさがこみ上げることがある。

私が学生だった頃はもちろんVHSの時代だったので、テープを止めたり巻き戻したりしながらアメリカのテレビドラマや映画を英語で食い入るように見ている。インターネットもなかったので、気に入ったセリフがあれば、何度も聞きなおしたうえで書き起こし、それを「セリフノート」としてまとめていた。ひとりで真似をして悦に入るためである。お気に入りには、Michael J. Foxだった。

友人たちが卒業旅行で海外に行くのを横目に見つつ、初めて海外に出たのは23歳、大学院生の時だった。渡航の2週間前に湾岸戦争が始まり両親には随分反対されたが、ずっと画面の中で見続けてきた憧憬の北米に向け、バックバックを背負って一人で出発した。最初の訪問地は2月初旬の厳寒の Chicago。飛行機の窓から見た整然とした街並みは夕景だったが、街に入るころにはもう真っ暗だった。町はずれのユースホステルがなかなか見つからず、人通りもまばらな夜道を30分ほども行きつ戻りつした。映画で見たオレンジ色の街灯。ナトリウム灯という、日本では高速道路などでしかほとんど使わないランプが、雪道をぼうっとオレンジ色に照らしていた。

翌朝は一転、眩いばかりの青空だった。ロビーではアメリカやヨーロッパの旅行者たちがソファに座り、湾岸戦争のニュースを真剣に見つめていた。朝食もそこそこに Downtown へ。正面には凍るミシガン湖。左右を見上げれば高層ビル群。その高層ビルの屋上のあちらこちらから水蒸気のようなものが上がっていて、日本には見ない風景だった。あれは水蒸気なのか？青空を背景にして、その白い水蒸気のようなものがゆっくりと天に昇っていく美しさは今でもはっきりと目に浮かぶ。

ひとしきりDowntownをひとりで歩き回った夕方、ホテルのキッチンで

夕食を作ろうと、地元の人しか買い物をしないような小さな小さな食料品店 (grocery store) へ。自分でレジ袋に詰める日本のスーパーとは異なり、茶色の紙袋に入れてくれて、慣れた手つきで渡してくれた。もちろん“Have a nice day.”というお決まりのフレーズと共に。1万キロも離れた東洋の島国・日本から来たばかりの外国人なのに、地元の人たちと全く同じように買い物をさせてくれたのがとても嬉しかった。水蒸気が立ち上るビルの間を、茶色の紙袋を脇に抱え、足元の雪をも気にせず、まっすぐ前だけを見て歩く。映画のワンシーンで見たような風景の一部に自分がなれたあの感動は一生忘れないと思った。

その後1か月かけてアメリカとカナダの8都市を回った。帰国後は海外旅行の魅力にとりつかれ、様々な国を訪れた。また、多くの人にお世話いただいてアメリカに留学する機会も得て、5年半も滞在させてもらった。

他国に住んだり、他国を訪れたりするのは、私の人生のなかではまさに宝物のような貴重な体験である。そして日ごろ普遍的な事実だと思っていたことが、日本という限られた場所での習慣にすぎないことがわかって愕然とする。そうやって愕然としたりショックを受けたり感心したり感動したりすることを通して、日本とか世界とかいう枠を気にしないで自分の思うように生きていく人間になれるのだと思う。私などはそういった人間にはなり切れていないのかもしれないが、若い人にはこれから無限の可能性がある。

これからも語学視聴覚室やCALL教室を大いに使って英語やその他の外国語を学び、それをきっかけにして世界を見に行ってもらえればと思う。そのきっかけの一部に言語研究センターがなれるならば、そしてその仕事に携われるならば私には望外の喜びである。 (岩畑)